

学生思い一すじにおしまれる惣津酪大校長

『光陰矢の如く、日月梭の如し』というが、惣津校長が24年農林省月寒種畜牧場長から、本県畜産課長として赴任されてから14年目であるが、35年4月、監査事務局長に転出されるまでの10年間を畜産課長として御活躍になりその間に残された足跡はあまりにも大きく筆舌のよくするところでない。全国一の名課長として巾広い学識と直情径行、真情を吐露して正義感と誠実さで事に当られ、今日の本県畜産の隆盛をもたらされた。また畜産課長時代中央の要職に招請された事もあり、政治家として国会に迎えんとの動きもあったが、これに耳をかされず、ただ本県畜産の発展を念じ、これ一筋に努力されてきた。35年6月再び農林部次長として農林行政に携われ、36年12月、県立酪農大学校が開校されるに当ってこれの初代校長に迎えられた。

農業教育が如何にこれからの農業者に必要最大のものであるかは、北欧、特にデンマークが酪農王国を築きあげたのは、1つに国民高等学校教育であったことは人の知るところである。知事さんが酪農大学校を設けられたのも固い信念と、高い技術をもつ精鋭の酪農士をつくることにあったと思う。

開校式の日(12月1日)、知事さんから「よい校風をつくれ」との挨拶と同時に、紫紺の布地に「酪大」の金文字の刺繍された輝く校旗を惣津校長に手渡された。また校長は「よい校風と人材を養成すること」を誓われた。この感激の一瞬は未だに臉にやきついている。

惣津校長をおいて他に初代校長は求められなかったのである。開校以来1年4ヵ月、1回生は津山と蒜山で各1期づつ、2回生は蒜山で1期間の授業を終えた。用地も現在の20ヘクタールに新たに農場36ヘクタールが拡大された、また建築も本館・講堂・食堂・寮・牛舎・堆肥舎・公舎等もできあがったが、木の香も新たな校長室にも、新たな校長公舎にもはいられず、目前に控えた第3回生の入学式も待たずに去られた事は残念でならない。あと1年で設備も略完成するし、第1回生の卒業もみることもできたのに、せめてあと1年いてもらいたかった。これは

私1人だけでなかろう。学校の整備もさることながら惣津校長の人がらを学生が眼で見、耳で聴き、心に触れることによって、よい学生がつくられ、ひいては立派な校風がつくられることになるのである。

酪農大学校長は、世のいわゆる学者であるのでなくして、校長たる人の心臓の鼓動が学生の心の鼓動に響きを伝え得る人、学生が師の名、師の徳を慕い求める人であるべきだと思う。

惣津校長は正に学生から師とし、父として敬慕されてきた。校長は精魂を傾けて教育にあたられた。絶えず新しい知識を求められていたし、あの不屈不とうの意思と実行力、強い背骨をもたれていた。巾広い包容力、寛容さ、部下を愛しよく面倒もみられ外地派遣を受けた者だけでも十数人に及んでいる。このような人は世に人多しと云えども求めて得られぬ人である。この人となりか学生が師父として校長を求める姿となって現われたと思われる。

短い蒜山での1ヵ年であったが、本年は100年目にみるような豪雪の年でもあった。朝早くハンチングに、両手を服のポケットにつっこみ、校内を巡視されていた姿が脳裡を去来する。真夏の日、鎌をふるって学生と共に山林の下刈りに汗を流されていた校長の姿等、思いでの数々…校長として、形式上は去られるが、いついつまでもその打込まれた一鍬の心魂は、酪農大学校の続くかぎり、学校の精神としてつぎつぎに受けつがれてゆくであろう。

校長先生が、いつまでも御壮健で、本県畜産の父として、またよき指導者としておつくし下さるようお願いして止まない。

最後に校長作詩の酪農大学校寮歌をかかげる。

- 1、緑したたる陽春に
 ジャージー遊ぶ蒜山の
 文化の香りいや高き
 学園したいて我は来ぬ
- 2、流れは清き旭川
 北斗の星座仰ぎつゝ
 固き決意の若人は
 誇りと栄を歌うなり

岡山畜産便り 1963.04

3、金肅の影、映ゆるとき
偲ぶや故郷の秋の曲
我感傷の夢追いぬ
真理の道はいとけわし

4、神秘の白衣蛭が峯
無限の光はほほえみぬ

われらが築きし酪農の
久遠の城を来り見よ
(はなお 38、3、15)

惣津律士氏の退職を惜む

県立酪農大学校長の惣津律士氏は、さる3月13日付けで退職されました。

氏は昭和24年、岡山県畜産課長として農林省から赴任されて以来、実に10有5年、戦後壊滅的な混乱の中から、新産業として飛躍的な発展を遂げた県畜産の揺らん期より、これに注ぎ込まれた絶えざる情熱、卓越した識見と実行力は多くの人々のよく知るところであります。そしてこれは今や本県が全国的な畜産県として注目を集める大きな成果となって実を結びつつあります。

氏が県畜産行政の指導的地位を去られるのは誠に残念であります。いまだ満身にこもる若々しい精神力にはいささかも衰えをみせず、今後は県酪農協連会長および県畜産会長として、また県人事委員としてらつ腕を振られますことはまことに喜ばしい限りであります。

本誌の歴史もまた同氏と共に歩んだ15年でありました。ここまで続けてこられたのもひとえに氏の御指導とお励ましの賜であることは申すまでもありません。ここに厚く御礼を申し上げ、氏の一層の御健康と御活躍を心からお祈りする次第であります。

(編集係一同)

惣津律士氏略歴

岡山市清水。56歳。昭和7年九州帝大農学部農学科卒。農林省種羊場調査嘱託、農林省畜産局農林技師、同農林技師、農林省月寒種畜牧場長、24年12月岡山県農地経済部畜産課長となり、35年4月まで満10ヵ年半にわたり県畜産行政を推進、次いで県監査事務局長、農林部次長を経て36年12月県立酪農大学校長。さき頃県畜産会長、県酪連会長に推された。

鶏痘の予防接種

鶏痘は夏から秋にかけて、成鶏では休産したり、ひなで発育が悪くなったりして、養鶏にとって害の大きい病気ですが、予防接種をすることによって、ほとんど、100%予防できます。予防接種は、この病気を媒介する蚊が発生する3週間位前までにやっておくようにし、おそくても6月10日前後までに予防接種を終わっておくことが大切です。